

JASIS

NEWS

No. 61

2018/6/22

日本インテリア学会会報

■副会長挨拶

30年の歳月

副会長 加藤 力

日本インテリア学会も設立30年を迎えた。人間で云えばようやく一人前になった、と云ったところか？

これを記念して、幾つかの関連事業が行われた。その一つに『63人のインテリア論』の刊行がある。丁度、学会設立10年の20年前には会報の別冊として『32人のインテリア論』が刊行されている。

たった32人だけだった“私のインテリア論”が63人に増えたのだから、この数年の月日の間にほぼ倍の人々がインテリアに対する確固とした自分の考え方をもち、自らこれを語ることが出来るようになったのだから、素直に喜んでよいのか、あるいは少し固く言えば、量より質で、インテリア論のその中身、内容が問題と、難しく捉えるのがよいのか？

インテリア学会設立の立役者、小原二郎先生ならば、おそらく前者にあたり、素直に喜んでくれるだろうと思うが、いかがであろう。

確かに、小原二郎先生はインテリア学の理論的支えとも云うべき柱を「木材から人間工学」に切り替えて、これをインテリア理論の礎としてインテリア基礎理論とした。私が云うのもおこがましいが、これはきわめて的を得たすばらしい発想と方法ではなかったか。63人のインテリア論を読むと、従来の人間工学や住宅理論からきっぱりと離れ、独自で、独創的、斬新なインテリア論が増えた、のではないかと思う。この意味で、小原先生は喜んでいてくれているに違いない。

30年という歳月は、確実に人と理論を自然と育ててくれる。

■講演会「創設30周年を迎える学会活動の活性化—学会創設の背景とあの熱意—」報告

講師 島崎 信（武蔵野美術大学名誉教授
元日本インテリア学会副会長・元顧問）
進行 上野義雪（日本インテリア学会副会長）

島崎信先生を講師にお迎えして開催された講演会は、日本インテリア学会の創設時の裏話や設立総会までの苦労話に始まり、これまでの30年という年月の長いようであり、短いようでもある歩みを聴くことができ、感無量のひとときでした。講演を聴いて、学会が創設された時代は、インテリアの黄金期であったように感じました。今もってインテリアへの関心は低下してはいないものの、社会の成長とともにインテリアの果たす役割が変化していることも指摘され、今後の橋渡しとなる提言、方法論も語っていただきました。また、島崎先生が小原二郎先生、渡辺優先生と関わられた経緯なども詳しく語っていただき、楽しく・熱く議論をしたこと、互いに切磋琢磨して学会の礎を築いたことなどをお聴きし、3人が知り合ったの



島崎先生

も会うべくして会えたという、運命の糸を感じました。

この様に創設30周年を迎えることができましたのも島崎先生をはじめ、創設時にご尽力いただいた諸先生方の賜物と感謝いたします。また、上野先生には講演資料としてこれまでの記録収集、編集とお世話いただきご苦労様でした。膨大な量であったと存じます。

ナビゲーターとしての役割ありがとうございました。

島崎先生におかれましては、今後とも日本インテリア学会へのご指導、ご鞭撻を引続き賜りたく思います。お身体を自愛いただき健康であって欲しいと祈っております。

長時間のお話し、ありがとうございました。

文 棒田邦夫（広報委員会委員長）

■インテリア学講座

図面や模型は通過点。実現にコミットする。

諫見泰彦（九州産業大学）

筆者は、所属する九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科（以下、大学）において、「学生が考えたこと、作ったものが、世の中の役に立つ」そのことを学生自身が実感できる、図面や模型で終わらない実体ある成果と、社会的評価が伴う住居・インテリア教育に取り組んでいる。同学科4年次科目「卒業設計」では、株式会社三好不動産と同社の関連企業で施工を担当する株式会社サンコーライフサポート（以下、不動産事業者）との産学連携による、学生設計作品の実現にコミットしたプロジェクト型学修「学生ブランドによるマンションリノベーションの設計と施工」（以下、学修）を、2011年度から実践している。

インテリアの門外漢である筆者は、大学では科目「都市デザイン」を講義し、科目「地域貢献学実習」では引率した学生とともに市民参画型のまちづくり実践研究に携わる。2010年度に学科が創設され、それまで所属した建築学科から異動した際、当然ながら就職実績もまだ定かではない住居・インテリア学科（当時は住居・インテリア設計学科）に入学した学生に報いようと、また不動産事業者と連携して筆者自身も学生とともに学ぼうと考え学修を開始した。これは日本インテリア学会への入会理由とも極めて近い。

リノベーションとは、既存の建物を改修し、その性能や価値を高めることであり、新築時とは用途や機能が変わる大規模な改修のことをいう。不動産事業者によれば、わが国のマンションは、20年から30年ごとに壊しては建て替える「スクラップアンドビルド」が繰り返されている。また新築物件が好まれるため、中古物件の1割以上が空室という状況が続く。大学が位置する福岡市でも不動産の賃貸市場は供給過剰に陥っており、空室を埋めるために、少ない

需要にどう対策を講じていくかが課題となっている。競合企業との家賃・敷金・礼金の値下げ競争から脱却するためには、リノベーションにより付加価値をつけてブランド化（競合企業との差別化を明確にすること）を図ることが効果的な対策となると考えられる。単身者向けのマンションが比較的多い福岡市では若い世代の入居比率が高い。その世代が共感するリノベーションを希求すれば、学生デザイナーの起用、即ち「学生ブランド」という発想に至る。

不動産事業者には、マンション所有者に負担をかけず、学生によるリノベーション設計を提供でき、大学には、学生がテーマ設定から設計、施工現場での工事監理までの実務に携わる、生きた住居・インテリア教育が実践できる相互のメリットが、学修にはある。学修における筆者の教員としての役割は、学生のテーマ設定から設計、さらに施工現場での工事監理等に臨む際の指導助言と、不動産事業者と施工技術者等の連携企業との連絡・交渉・調整である。

初年度である2011年度の学修参加学生は2名であった。2013年度は3名、2014年度は2名、2015年度は3名、2017年度は2名の学生が参加し、これまでに12名の学生が各々卒業設計に取り組んだ。4年間にわたる住居・インテリア教育の集大成としての「卒業設計」において、学生が努力して図面や模型を作成したとしても、通常ならばそれはアンビルドに終わる。しかし学修では、学生の作品を実現することができ、入居者への供給を通して社会の役に立つことを、学生自身が在学中に見とどけることができる。学生にとってこれは極めて稀な体験的学修であると考えられる。

講義において、設計技術を学んだ学生でも、学修開始時は実務型の「卒業設計」が自身にできるか否か不安を感じていた。また作品が実現するという緊張感から、本来は設計実習で慣れているはずの作業が困難となる。プロジェクト型学修ならではの場面も多々あった。通常の「卒業設計」に取り組む他の学生のように、自身のペースで作業を進めることができず、焦りも感じていた。しかし苦労を重ねて完成した作品が達成感を、またスケジュールに追われた時間を振り返ることが、むしろ学生に充実感を与えている。

学修に取り組んで最も良かったことは、施工現場における多くの技術者との対話であると、学修終了後に1人の学生が答えた。住居・インテリアの仕事はたくさんの人が協力して成り立つ。自身の考えだけでは物事は前進しないことを学生は学んだ。また自身の設計による作品がそこで実際に実現していくことが、学修の最大の魅力であり下級生にも同じ体験をさせたいと学生は述べた。筆者は学修の継続を意図して下級生を参加させ動機づけを行った。学修に取り組む上級生の姿に刺激を受けながら、講義で学ぶ知識や技術がどう実務に活かされるかを下級生も理解できた。

筆者は、「卒業設計」が机上の構想に終始せず、学生ら

しい斬新なデザインの作品を実現させる喜びと難しさを、学生自身が実感できる学修を、今後も推進・発展させたいと考えている。なお2016年度からは、同学科3年次科目「住居・インテリア特論」において、学生用アパートのリフォームを課題に株式会社ハウスメイトマネジメントと、同じく科目「インターンシップ」において、モデルルーム

の設計と施工（施工も学生が行う）を課題に株式会社レオパレス21と、同趣旨のプロジェクト型学修を実践している。

下欄では、日本インテリア学会第24回卒業作品展において優秀作品賞を受けた、2015年度の卒業設計「モノが散らからない仕組みのある部屋づくり」（梅森晴子／現 株式会社スペース）等、学修において実現した作品を紹介したい。



卒業設計「可変性のある空間－学生によるリモデルマンションの設計・施工・販売－」（2011年度）設計者 茶谷枝里子／現 長崎市役所／日本建築学会九州支部長賞受賞



卒業設計「日本に住む外国人の部屋」（2015年度）中村麻貴／現 株式会社サンコーライフサポート／日本建築仕上学会卒業設計奨励賞受賞



卒業設計「Apartment House -Designed By Student-」（2011年度）設計者 大西里沙／現 有限会社エスパジオ／日本建築仕上学会学生研究奨励賞受賞



卒業設計「住む人の日常をつくる不満レスな部屋づくり」（2017年度）設計者 江川詩乃／現 大和ハウス工業株式会社／日本建築学会全国大学・高専卒業設計展示会推薦



卒業設計「モノが散らからない仕組みのある部屋づくり」（2015年度）設計者 梅森晴子／現 株式会社スペース／日本インテリア学会卒業作品展優秀作品賞受賞



卒業設計「住む人の「毎日」と「これから」を考える。」（2017年度）設計者 許山若奈／現 株式会社レオパレス21／日本建築仕上学会卒業設計奨励賞受賞

インテリア学講座

高橋浩伸（熊本県立大学）

今日、「インテリア」の語句を辞書（『大辞林第三版』）で紐解くと、「建築物・部屋の内部空間」とあります。また、「室内装飾。室内調度品」とあり、一般的に建物の内部空間を指し、広義では壁紙や床材、照明器具や家具などの室内を装飾するものであったり、またそれらによって装飾された装飾性・デザイン性を指すとも考えられます。

一方、建築の構法や材料、空間の考え方などから、近代以前の日本建築の歴史には、寝殿造りを除けばインテリアという考え方は存在しなかったという見方もあり、西洋におけるインテリアの概念と日本のそれとは大きく異なっているとも言えます。

インテリアの概念はさておき、インテリアに関する学問としてのインテリア学を大上段に語ることは容易ではありませんが、インテリアデザインの実務者としての経験と、環境心理学の分野において、環境評価や空間認知などの研究を並行して行ってきた身として、浅学非才ながらも、インテリア学講座の一端として、ここに現在及びこれまでの個人的な研究内容等のご紹介をさせていただきます。

私がこれまで取り組んできたことは、下記の3つのテーマに分類できます。

1. 建築美論（日本美）に関する研究
2. 建築デザイン手法に関する研究
3. 住環境調査に関する研究

まず、1. 建築美論（日本美）に関する研究に関する背景として、デザイナーとして、美的空間創造に貢献したいという強い思いがあります。

21世紀の今日における建築的テーマとしてよく挙げられるものに、「地域性」や「歴史性」などがありますが、これは、近代建築におけるインターナショナル・スタイルにおいて「地域性」や「歴史性」を否定したことに対し、これと同じ轍を踏まぬようにという反動とも見て取れます。

また、近代以前の日本に、西洋のような一貫した形での思索の集大成としての「美学」は無かったと言われていました。ただし、近代以前の日本にも当然ながら美的概念は存在しており、「わび」「さび」「幽玄」「もののあわれ」「いき」などが現在まで継承されていますが、残念ながらこれらの概念が、学術的テーマとなることはあまりありませんでした。

そこで今日、その地域ならではの風土や文化・思想にあった美的空間を創造しようとするれば、西洋の美とは違う、日本の特徴的な美を理解・把握しなければならないと考えるようになりました。

このような背景から、現在私の研究室では、『現代における「いき」の概念に関する研究』や『現代における「いきな建築」に関する研究—茶屋建築における「いき」の継承—』といった研究を続け、現代の若者たちに「いき」の概念が継承され、美的概念として認識されている

のかということ进行调查・分析しております。

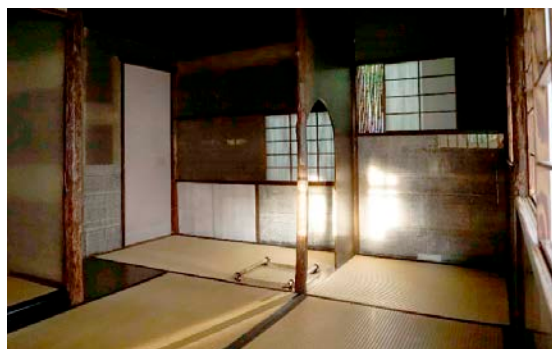
更に、個人的な見解ではありますが、『デザインとは形（秩序）を与えること。形は存在（意味・力・場）を示す。』という考えから、建築デザイン・建築設計を科学に近づける試みとして、「複雑系」の科学に注目し、形の科学に関する研究を行い、形の意味・力を考えようとしています。例えば日本建築における茶室の意匠や開口部のデザインに複雑系を見出し、それらの分析を行いながら、複雑系デザインによる空間創造の手法を探る研究として『フラクタル次元（複雑系）による「日本建築の美」の解析』などを行っています。



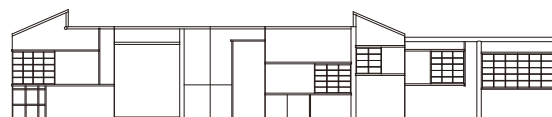
金沢ひがし茶屋街「志摩」



有楽苑 如庵



有楽苑 如庵 内部



有楽苑 如庵 内部展開図（四面連続）

またこれまでの研究成果として、日本の美的概念である「わびさび」や「幽玄」等に「あいまい」という概念が内包されていることを検証しながら、更にSD法→因子分析の手法を用いて、これらの美的概念の階層構造における位置づけを行い、日本人の美意識の一つの断面を示した『日本人の美意識に関する基礎的研究』や、環境評価手法としての「評価グリッド法」を用いて、インテリア空間に関する印象評価調査を行い、現代日本人の美意識の評価構造を示し、美的価値観の傾向や概要を把握した『インテリア空間における美的価値観と評価構造』。更にこの研究成果を基に、美的インテリア空間創造のためのデザインコードとして「美のチェックリスト」を創出した『インテリア空間における美のチェックリストの創出』などがあります。

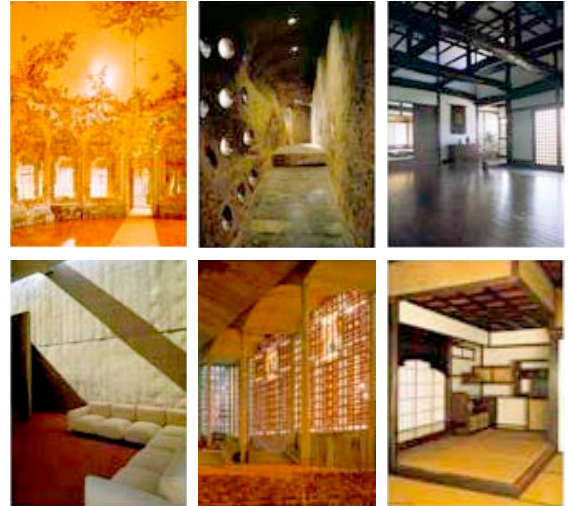
これらは、これまで思想や哲学の分野でしか語られてこなかった「美」に関して科学的アプローチを行う手段として環境心理学（認知心理学）のフィールドにおいて研究を進めているものです。

次に、2. 建築デザイン手法に関する研究ですが、先述の建築美論（日本美）に関する研究の延長として、環境評価手法としての「評価グリッド法」を用いて、今度は美的価値観ではなく、住宅建設時における建て主の要望に着目し、実際の住宅建設に関して建て主（夫婦）のニーズ調査を行い、そのニーズの階層化、視覚化し、それを実空間のインテリアデザイン等に反映させることで、よりユーザビリティの高い住宅建設を目指したデザイン手法の実践報告として『住宅建設における建て主のニーズ把握に関する研究』があります。

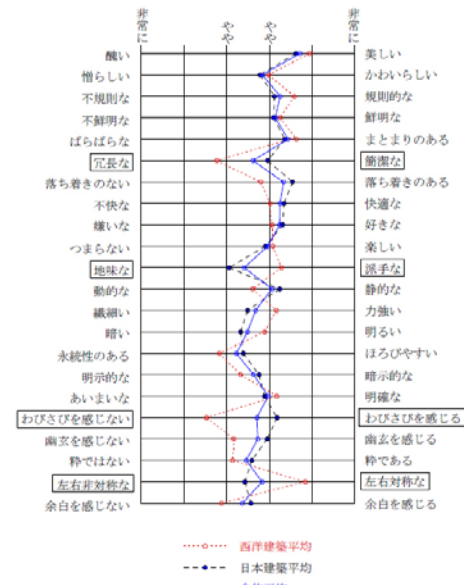
また、これら研究に用いた「評価グリッド法」を改良し、「一定の場に限定されない」や「個人的や流動的であいまい」な概念とされる「健康」に関してイメージ構造を示す新たな手法として「イメージグリッド法」を開発し、健康に関する特徴的形要素構造モデルを示した『イメージグリッド法を用いた健康形成要因構造に関する研究』があります。この研究は、これまでの既往研究においては、住環境の状況が健康にどのような影響を与えるかというものが多く見られましたが、本研究では健康という概念自体に着目し、健康という概念の構造モデルを調べることで、住環境と健康との関係性にアプローチし、「近親者との人間関係」の重要性を見出したものです。

更に、3. 住環境調査に関する研究に関しましては、住環境に関する最適光環境を知るために、調色照明器具と縮尺模型を用いた印象評価実験を通して、住宅で想定される生活行為の下での照明光の照度・色温度の組み合わせと照明の好ましさの関係を明らかにすることを目的とした、『生活行為を想定した室内照度・色温度の好ましさに関する模型実験』やこのRGB蛍光ランプを用いた住宅居間における照度と色温度の組み合わせの好ましさの調査結果を基に、LED光源でも同様の結果となるのか比較し、考察することを目的とした『住宅居間における照度・色温度の好ましさに関する蛍光ランプとLEDの比較模型実験』などの研究があります。

ここでご紹介した研究等は、多様化するインテリア学におけるほんの一断面にすぎず、インテリア学の範疇かどうかの議論も必要かもしれませんが、インテリア空間の創造に関する実践的研究事例としてご覧頂き、今後とも皆様からのご指導ご鞭撻等を頂ければ幸いです。



SD法におけるエレメントの例



SD法評価結果の平均プロフィール

No.	尺書	共 計	美し さ (評価性)	安定 性	調和 性	あ い ま い	余 白	ろ び ゆ ず	鮮 明 さ	非 線 性	
1	好 評 値	好	0.849	0.284	-0.055	0.181	0.011	0.049	-0.101	0.100	0.00
2	好 評 値	好	0.835	0.279	-0.050	0.172	-0.011	0.030	-0.145	0.132	0.05
3	好 評 値	好	0.747	-0.078	0.030	0.102	-0.001	0.124	-0.148	0.275	0.72
4	好 評 値	好	0.745	-0.009	0.148	-0.078	-0.222	-0.229	0.000	-0.180	0.78
5	好 評 値	好	0.722	-0.129	0.054	0.189	0.289	0.114	0.189	-0.095	0.76
6	11力評価性	好	0.672	0.782	-0.102	0.120	-0.216	0.039	-0.011	-0.040	0.80
7	11力評価性	好	0.604	0.787	0.017	0.113	-0.152	0.244	-0.114	0.071	0.78
8	11力評価性	好	0.570	0.766	0.043	0.181	0.097	-0.130	0.034	-0.187	0.81
9	11力評価性	好	0.645	0.641	-0.140	0.230	-0.127	0.082	-0.143	0.140	0.85
10	11力評価性	好	-0.203	-0.423	0.030	0.031	-0.310	0.185	-0.147	-0.211	0.72
11	11力評価性	好	-0.040	0.089	0.052	-0.031	0.192	0.040	-0.112	0.125	0.86
12	11力評価性	好	-0.011	-0.218	0.794	-0.112	0.077	-0.181	0.001	0.011	0.73
13	11力評価性	好	0.244	0.279	0.026	0.000	-0.107	0.039	-0.110	0.342	0.74
14	11力評価性	好	0.214	0.481	0.119	0.004	0.131	-0.080	0.044	-0.180	0.80
15	11力評価性	好	0.132	0.181	-0.091	0.747	-0.207	0.033	-0.060	0.008	0.77
16	11力評価性	好	0.189	0.385	-0.120	0.623	-0.242	0.191	-0.058	0.359	0.79
17	11力評価性	好	-0.218	0.019	0.140	-0.047	0.002	0.094	-0.072	0.182	0.75
18	11力評価性	好	-0.020	-0.221	0.045	-0.101	0.724	-0.224	0.002	0.082	0.70
19	11力評価性	好	-0.187	-0.236	0.017	-0.116	0.589	0.227	-0.020	-0.192	0.75
20	11力評価性	好	0.215	0.292	-0.174	0.035	-0.150	0.000	0.117	-0.092	0.72
21	11力評価性	好	-0.201	-0.051	-0.140	-0.154	-0.091	0.030	0.030	0.010	0.85
22	11力評価性	好	0.125	-0.221	0.182	-0.082	0.385	-0.068	0.010	0.612	0.73
標準偏差			0.820	0.158	0.083	1.052	0.517	1.051	1.017	1.163	16.06
誤差平方和			17.838	14.035	0.475	6.878	11.443	6.735	6.033	5.215	227.118
累積平方和			17.838	28.182	41.828	58.508	81.848	88.724	91.838	97.111	

因子負荷量

インテリアデザイン教育で育成する人間力と地域創生人材

近藤正一（日本文理大学 工学部 建築学科 教授）

はじめに

私の勤務する日本文理大学は、名前とはうらはらに、日本の端っこに近い大分県に立地し、地方ならではの地域社会と一体化した教育を目指す小規模な私立大学です。本学では、人間力教育と社会・地域連携および産学一致の精神を教育理念としており、全学の全開講科目において、単位を修得するために達成すべき到達目標が人間力（＝こころの力＋職業能力＋専門能力＋社会人基礎力 と定義）によって設定され項目ごとに配点されます。私は、2001年度にインテリアデザインコース創設担当教員として着任して以来、本学らしいカリキュラムを構築し実施してきました。ここでは、現在、私が取り組んでいる教育研究内容の一部をかいつまんでご紹介させていただきます。

1年前期「プロジェクト実習」

ものづくりの喜びを知るための取り組み（こころの力の育成）

入学する学生のうちの多くは、夢と希望をもちつつも、一方で、受験疲れからくる自信の喪失など漠然とした不安をもっています。初年次の導入教育では基礎学力もさることながら、特にこころの力（＝他者との望ましい関係を築く中で人格の向上を目指し自己の能力を発揮する力）が重要だと考えており、インテリア教育を通じてこころの力を育成するために、例えば、1年前期のプロジェクト実習という科目で地域の夏祭りに参加する取り組みを実施しています。大学の近くに鶴崎という地域があり、かつては肥後熊本の飛び地でした。地元の歴史文化研究会や商工会青年部の多くの方々にご尽力をいただき支えられながら、学生たちは、地域を飛躍的に発展させた加藤清正公の命日である7月24日の前夜祭であることなどを学び、とうろうオブジェを制作し、参道に展示します。ろうそくの灯は、それ自身が美しく、たいいていものは綺麗に照らし出されますから、通りかかったほとん



写真1 清正公鶴崎二十三夜祭の様子

どの方々キレイだねえと喜んでくださいます。多くの学生にとって、自分がんばると、まったくの第三者が予想以上に喜んでくれるという体験は、初めての貴重な経験になります。ものづくりの喜びを身体に染み込ませ、こころの力を磨くきっかけを得て、次の課題に臨みます。

1年後期「スペースデザイン」

おとなのものづくりを知るための取り組み（職業能力の育成）

子どもの頃は、良い作品が完成すると先生からほめられ、家族が喜んでくれて、満足することにより次なる成長につながりますから、それだけでも十分に教育上の効果が認められます。しかしながら、自分の与えられたノルマを果たせばそれで優れた仕事といえるのか、そもそも仕事とは何かを自ら問い仮説を立てて検証する行為を繰り返しつつ、自分なりの使命感を自ら見出し、独自の仕事の仕方を見つけていかねば、新たな仕事を継続的に創造していける人材は育成できません。そこで、本学では職業能力（＝産業界の一員となり地域・社会に貢献するために必要な能力）を人間力の一部として位置づけ、キャリア教育の一貫として、学生たち自らが企画・実行するさまざまなボランティア活動や社会見学研修会に取り組んでいます。それらの課外活動とタイミングを合わせて、木材の生産から加工・流通といった経済活動の一端としてデザイン活動を行う体験授業を実施することで、社会の一部を担う「おとなのものづくり」を目指すよう誘導します。人体模型で人間工学を学び、木材加工に四苦八苦し、一本では折れてしまう細い材を組み合わせて丈夫にするために試行錯誤する点も学生にとっては興味深く面白いようです。なお、この活動は林野庁主催の木を活かす学生課題コンペにて木を活かす活動部門賞をいただきました。



写真2 大分県立美術館OPAMでの展示の様子

2年前期「設計製図3」

地域課題の発見と解決方法の提案（専門能力の育成）

自分がいずれはデザインのプロとして社会に頼られる人材になるのだという自覚をもたせることが、次なる課



写真3 地域で活動する市民を交えての講評会の様子

題となります。例えば、設計製図の課題として「超高齢社会に希望をもたらす二世帯住宅」と題し、高齢者率58%の佐賀県地域で活躍する建築士や公務員、まちづくり活動を主導する市民らの協力を得て、フィールドワークやミーティングを重ね、地域での暮らしや景観・まちなみに対する提案を行います。COCの活動にも関連し、地域住民に対する発表会にて授業での成果を一般公開するとともに、市民からの意見や質問を伺い対話を行うことで、専門家としての当事者意識を育成します。

2年後期「プロジェクト2」

前に踏み出す・考え抜く・チームで働く（社会人基礎力の育成）

これまでの教育で、多くの学生はある程度の地域社会に対する問題意識と使命感をもつようになりませんが、やはり個人の力には視点の偏りや能力の限界があり、方向性を共有できなければ大きな力は発揮できません。そこで、社会人となるために必要な基礎力としてチームワークが要求される課題を用意しています。例えば、大分県内のアーティストが集う「まちなかGO！」というイベントにグループで参画し、時間を超えて空間をつなぐ趣旨の一般市民向けデザインワークショップと大分市の歴史を体感できる作品制作および展示会を実施しました。なお、この活動の様子は地元のNHKで紹介されました。



写真4 大分市美術館でのワークショップの様子

3年以降「研究ゼミナール」「卒業研究」

地域社会と協働する取り組み（地域創生人材の育成）

2年生までのインテリアデザインコースでの教育成果を踏まえ、3年生以上では専門教育科目を履修しながら研究室に所属し、ゼミナール全体でのフィールドワーク、個別の卒業研究のための活動を実践していきます。近藤研究室では、幸いにしてさまざまな自治体や企業、地域住民との多くの活動に参画させていただいており、例えば、竹職人グループとのコラボレーション、大分空港の施設改善、店舗デザイン、民家を芸術家のアトリエにリフォームする活動、景観ガイドラインを見直すための調査、老朽化した駅の改修提案および周辺のまちづくりなど、地域をキャンパスのようにして学生たちが活躍できるチャンスに恵まれています。実践的なデザイン活動を通して、卒業後も各自の人間力を遺憾なく発揮し、生涯を通して地域を創生していける人材を育成しています。



写真5 「竹と社会の新しい関係」アートプラザでの展示

まとめと補遺（資格教育など）

以上のように、2001年に着任して以来、本学の教育理念である人間力教育と社会・地域連携および産学一致の精神に基づいた実践的なインテリアデザイン教育を実施して参りましたが、もちろんグループワークばかりではなく、座学で活躍する学生もおりますし、資格取得に邁進する学生もおります。2003年度から毎年、主に建築学科2年生を対象として、インテリア設計士の資格検定試験を実施しており、すでに150名を超える合格者を輩出しています。この4年間は、全員合格です。その他、インテリアコーディネーター、商業施設士、福祉住環境コーディネーター、宅地建物取引士など、インテリア関連資格を取得するように勉強会を開催して指導しています。

課題への取り組みや、資格の合格などを通し、学生たちは、入学時に抱えていた漠然とした不安感がなくなり、夢と希望に向けて前へ踏み出す勇気をもって卒業していきます。

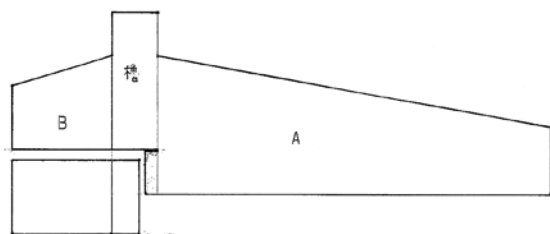
「櫓の家」

小澤 武（小澤建築研究室）

新企画「インテリア学講座」への執筆を編集者より依頼されたことに応え、現在（※編集者注、2017年夏頃）施工中の「櫓の家」のことをお知らせしたいと思います。

一昨年春、住宅の設計の依頼があり、今までの仕事を見ていただく折にオーナー夫妻を交えての雑談の機会を何度か持ち、住宅像が沸き上がってきそうな頃、土地の取得に関して相談を受けました。築45年、25坪の平屋が建つ、敷地132坪の南面半分に樹木草花が自然のままに生きる庭。ご夫妻は、ここにまったくの新築を考えておられるようでありました。

1年後、模型とイラスト風プランを携えてプレゼンに臨みました。ダイアグラム（下掲、断面図）に沿って説明しますと。



「櫓の家」ダイアグラム

既存の平屋（A）に不足の機能の諸室（B）を増築するのですが、高低差をインテリアの視覚効果として活かしたい、朝日と夕日を日常生活で感じていたいということから、遊びの空間として「櫓」をインターフェイスとして挿入しました。

中古住宅のコンバージョン、櫓という二重の想定外にご夫妻は顔を見合わせてしまいました。

しばらくして笑顔のお二人に直面し、難儀な実施設計を経て、先日上棟式にこぎつけました。信頼する棟梁を筆頭に「TEAM ZERO」を組織し、直営方式で仕事に当



「櫓の家」上棟後、内部

たっています。

上棟後の写真中央に立ち上がっているのが櫓です。櫓上部の窓から内部へ光が差し込んでいることがお分かりいただけるでしょうか。

過去の事例とともに今回の仕事についても本学会で発表したいと思っておりますが、まとめる時間が取れないのが実情です。

■平成30年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

皆様のお手元にご案内が届いておりますように、今年度の総会は平成30年6月16日（土）に千葉工業大学において開催されます。皆様のご参加をお待ちしております。なお、既に多くの方から出欠のご返事を頂いておりますが、まだ投函されていない方は早めにご投函いただければ幸いです。

本学会が設立されて30周年となりますので、いくつかの記念行事を進めております。広報委員会を中心にしまして発刊されました「63人のインテリア論」が一つですが、総務委員会ではこの発刊に合わせて、感謝状の授与、講演会を企画いたし、4月14日（土）に開催いたしました。当日は約50名強の方の参加を得ました。

感謝状は本学会に20年以上継続して入会して頂いた方を中心に授与されております（理事・評議員を除く）。今後とも本学会に積極的に参画して頂ければ幸いです。

講演会では、講演者として島崎先生（元副会長、元顧問）、ナビゲーター役として上野副会長になって頂き、「創設30周年を迎える学会活動の活性化～学会創設の背景とあの熱意～」と題してお話を頂きました。その当時の設立メンバーの方々の息遣いが聞こえてくる感じがい



感謝状授与



感謝状授与会員と直井会長



講師の島崎信先生と進行役の上野義雪先生

たしました。

皆様からのご意見を頂戴しながら、他の行事も考えていきたい所存ですので、正会員の皆様からのご意見を頂ければ幸いです。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学）

広報委員会では、創設30周年事業として「63人のインテリア論」の冊子編集に携わりました。約90名の方々に原稿を依頼し、予想を上回る多くの方々にご投稿をいただき、心より感謝申し上げます。一方、広報委員会の不手際により、ご執筆を頂いた森保洋之先生ならびに宇賀敏夫先生にご迷惑をおかけすることになった執筆用のフォーマットが誤っていたこと、執筆依頼文書を郵送し、原稿を送付いただいたにもかかわらず掲載ができなかったこと、心よりお詫びを申し上げます。今後、今回の不手際を繰り返さない様、十分な検討の上、委員会としての職務を全ういたします。森保洋之先生、宇賀敏夫先生の原稿につきましては、同会報に同封しましたので差し替えをお願いいたします。

本会報第61号より、新しいページとして「インテリア学講座」と題した企画を掲載しました。今回は九州支部

会員、北海道支部会員の方々にご投稿をしていただきました。詳細については「編集後記」に記載してあります。どうぞよろしくお願いいたします。

■お知らせ

○高橋鷹志名誉会長が、2018年日本建築学会大賞を受賞されました。（2018/05/30）

○日原もとこ先生が『旅』をテーマとした心に残った徒然なる語りを聞かせる『ありものいかしの旅』で、講演をします。

語りの日は、2019年3月2日（土）東京都町田市能ヶ谷3丁目6-22（株）鈴木工務店・可喜庵（かきあん）。

申し込み：メール kakian@suzuki-koumuten.co.jp

お知らせ：<http://www.suzuki-koumuten.co.jp/kakian/>

今年度は新しい体制でスタートしました。1年を振り返って会員の皆様にはご迷惑をかけっぱなしであったように思います。また、大学の先生方におかれましても大学の授業や雑用は以前の2倍、いいや3倍にも増えているかと、おいたわり申し上げます。

結びに、日々お忙しいとは存じますが、広報業務である会報の執筆依頼がございましたら、ご協力方よろしくをお願いいたします。

□国際委員会

委員長 ペリー史子（大阪産業大学）

今回は特にありません。

□論文審査委員会

委員長 渡辺秀俊（文化学園大学）

2017年度の日本インテリア学会論文報告集28号については、応募締め切りまでに32編の投稿がありました。2016年度の投稿数は12編でしたので、大幅に投稿数が増加したことになります。本学会の研究テーマの広がりや深まりを感じる次第です。それぞれに意欲的なテーマのもとに論文を投稿して下さった会員の皆様に御礼申し上げます。また、短い期間にもかかわらず迅速かつ厳正な査読にご尽力いただいた査読委員の皆様にも深謝申し上げます。

2018年度のAIDIA Journalについては、例年通りとすれば6月上旬頃にAIDIA事務局から論文募集告知があると予想されます（論文投稿締切は、昨年度は9月1日）。日本インテリア学会論文報告集については、論文投稿締切を例年より1ヶ月早い9月末で予定しています。早めに論文執筆の準備をしていただき、本年度も多くの会員の皆様から論文投稿をしていただけましたら幸いです。

本学会の『論文報告集募集規定』の第1条1項には、

論文報告の内容として「インテリアに関する下記の論文または報告とする」と規定されています。この文面にある「インテリア」が指し示す内容が何であるかは、論文の査読の段階においてしばしば議論になります。本学会が対象とする「インテリア」という事象が何であるかについては、時代とともに変化する（変化してもよい）という見方もあり、日本インテリア学会全体でコンセンサスを形成していくべきことであると思います。また、論文審査委員会としては、投稿数の増加に伴って、公正な審査基準を維持しつつも、より迅速な査読システムを再構築する必要があると感じています。本学会の論文審査について、今後とも会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

□表彰委員会

卒業作品展担当 高月純子（女子美術大学）

今年度も第30回日本インテリア学会大会会場にて、第25回日本インテリア学会卒業作品展を開催いたします。会期は2018年10月21日（日）10：00－17：00（仮：実行委員会調整中）。会場は千葉工業大学 津田沼キャンパス 7号館1階 フレキシブルワークスペースにて。作品出展の要項、詳細は各教育機関にメールまたは郵送で6月末に送らせていただく予定です。出展を希望する場合は7月31日（火）までに出品登録書の提出をお願いします。

本作品展に出展する教育機関は例年、工業高等学校、高等専門学校、専門学校、短期大学、大学、大学院と学校の種類が多く、さらに建築系、家政系、デザイン系、環境系など分野も幅広いことが特徴です。作品の内容も机上の小物から、家具、収納方法、室内意匠、仮設空間、建築、都市計画、環境計画など多岐にわたります。そこで、今年度の出展登録書には『日本インテリア学会作品展への出展作品として』の評価と選出した理由、位置付けを、担当教員による記載をお願い致しました。この記載されたコメントは展示作品を見る側のインテリアに対する理解を深める機会や、今後のインテリア教育の理解と把握に活かすことができると考えています。出品される教育機関の方にはお手数お掛けしますがどうぞ協力をよろしくお願い致します。

■平成30年度支部だより

□北海道支部

支部長 小澤 武（小澤建築研究室）

今回は特にありません。

□東北支部

支部長 早野由美恵（東北芸術工科大学）

東北支部におきましては、平成30年3月17日、支部総会及び、見学会を宮城県仙台市内にて開催しました。

まずは、宮城県仙台市青葉区にある国宝「大崎八幡宮」を見学しました。大崎八幡宮は仙台の総鎮守として藩祖である伊達政宗やその後の藩主達に厚く尊崇され、一方仙台の「封体神」という十二支の神を信仰する習俗から乾の守護神として崇められているそうです。

社殿は伊達政宗の名により慶長九年より十二年の月日を掛け当時の名匠たちを招き造営しました。その様式は権現造りで外観は鮮やかな斗栱や彫刻が施され、壁や柱は総黒漆塗り屋根は柿葺きの造りとなっています。内部はすばらしい障壁画や草花の描かれている格天井等、格式の高さを伺わせる荘厳な空間でした。安土桃山時代の文化を伝える最古の建造物として明治三十六年に特別保護建造物、昭和二十七年に国宝に指定されたそうです。そのような建造物において普段は入ることの許されない場所の見学会はとても貴重なものでした。残念ながら本殿内での撮影は禁止のため紙面ではお見せできませんが、一見の価値のある建物です。

その後は場所を仙台市内の六金仙台駅前店へ移動し、本年度の事業報告と決算報告、次年度の事業計画案と予算案が審議され原案通り承認されました。

場所を同じくし、続けて交流会も行われました。そこでも様々な意見が出され、盛況のうち閉会となりました。（参照 <http://www.oosaki-hachiman.or.jp/origin/>）



大崎八幡宮見学会での風景

□関東支部

支部長 内田和彦（オカムラ）

JASIS NEWS No. 60でお知らせした第30回大会の準備を引続き行っています。月1回のペースで実行委員会を開

催しており、内容も少しずつ固まりつつあります。開催概要に関しましては総会のご案内と共にお送りいたしました。10月20日（土）に見学会と懇親会、10月21日（日）に研究発表会・卒業作品展、講演会を予定しております。

見学会は最新のオフィス見学に加えて、最新オフィスの潮流などを聴く時間を設ける予定にしています。講演会は「星のや東京」などのデザインを手掛ける東利恵さんをお招きして、デザインと素材をテーマに制作秘話などもお聞かせいただく予定です。有意義な大会となるよう継続して準備を進めていきます。

□東海支部

支部長 河辺伸二（名古屋工業大学）

4月27日（金）に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会のリレーセミナーで、東利恵氏（建築家、東 環境・建築研究所代表）による講演会を、名古屋栄ガスビルにて開催しました。演題は「リゾートの空間」で、氏の一連の作品である星のやシリーズの（軽井沢、京都、竹富島、富士、東京、バリ）を魅力的な映像を見せていただきながら視聴いたしました。非日常の空間デザインを、つくる場所の意味を読み取って、それぞれ個性的なりゾート空間を創作されていることに一同感動いたしました。今回は、初めてJIA愛知との共催ということもあって、参加者約110名という大変盛況の有意義な講演会でした。本年の大会講演会でも、東氏の講演が予定されているとか。何回視聴しても感動する内容ですので、楽しみにしております。

なお東海支部としましては、本年6月30日（土）に支部総会を予定しています。



リレーセミナー講演会の様子

□北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学）

今回は特にありません。

□関西支部

支部長 片山勢津子（京都女子大学）

昨年度から新組織にてスタートしました。ただ昨年度は私が在外研究員として国外におりましたので、副支部長の中村孝之（生活空間研究室）氏に支部長代理をお願いしていました。留守中は色々ご迷惑をおかけしました。皆様のご協力に、この場をお借りしてお礼申し上げます。以下、昨年度からの活動についてまとめてご報告します。

まず、本部と連携しての活動として「スマート・インテリア研究部会」を、関西支部中心にスタートしました。インテリアでの実用化が進むIoT、AI、RTなどの活用を考える研究活動です。また、「論文集の電子アーカイブ化」への取り組みについて30周年記念行事として活動を始めました。

その他の支部の活動としては、2月16日、京都 数研出版関西本社ビルを見学しました（関西インテリアプランナー協会 共催）。また、講演会として3月2日、大阪工業大学梅田キャンパスにおいて、シンポジウム「インテリアデザインの時代：ライフスタイルをめぐる工業と芸術」（大阪市新美術館準備室、大阪工業大学 共催）を行いました。ゲストスピーカーとして、東京大学大学院教授 松村秀一氏と編集者 川床優氏の講演、本支部の中村孝之氏による住宅インフィル研究報告、そして大阪工業大学副学長 宮岸幸正氏を加えたパネルディスカッションを交え、住宅から公共・商業空間まで、工業と芸術、機能と表現が交差するインテリアの世界を見渡し、ライフスタイルと社会の変化を考察しました。



シンポジウム風景



支部総会後の懇親会にて

今年度は、まず支部総会を4月28日に開催し、見学会や講演会の企画について話し合いました。支部の催しにつきましては決定次第WEBサイトに掲載いたしますので、是非ご覧ください。

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔（近畿大学）

2月に行いました講演会についてご報告いたします。

- ・ 題 目：『古民家・古材とは』
- ・ 講 師：貴船一樹 氏
（一般社団法人古民家再生協会広島）
- ・ 日 時：2018年2月23日（金） 19:00～20:30
- ・ 場 所：学校法人広島工業大学広島校舎301号室
- ・ 参加人数：22名

中国・四国支部の学生ネットワーク「Munsell」の企画で、「一般社団法人 全国古民家再生協会」の広島支部である「一般社団法人古民家再生協会広島」の代表理事貴船様をお招きし、『古民家・古材とは』という題目にてお話をいただいた。古民家とは50年以上経た建物であることや、その古民家から取り出された木材が古材であること、原寸大の模型を使つての仕口の話など、出席者の8割が学生であったため、ノートに取りながら古民家の基礎知識と再生の魅力について学ばせていただいた。教員などからは、自らがかわる古民家再生のプロジェクトを基に具体的な質疑応答がなされ、その内容や、やり取りが興味深かった。講師のお話をいただいた後に、一般社団法人古民家再生協会広島のHPをのぞかせていただき、そこから関係する他のHPも見せていただいた。「一般



原寸大の仕口



会場風景

社団法人古民家再生協会広島」へ参加しているメンバーに日本商環境デザイン協会の方もおられたり、古民家関係の資格だけでも「古民家鑑定士」「伝統再築士」「古民家簡易鑑定・古材鑑定士」「新民家プランナー」などがあるようで、急激な古民家再生の広がりや身近さに驚かされた。（担当：平田）

□九州支部

支部長 森永智年（九州女子大学）

支部活動報告はありませんが、東海支部所属の金田美世先生の紹介で、旧安川邸の保存調査に協力した最近の出来事を報告いたします。

昨年、10月21日に九州支部主催の見学会を行った旧松本邸の西隣りに旧安川邸があります。旧安川邸は、松本健次郎の父親である安川敬一郎（注）の邸宅を1912年に市内の若松区から大座敷部分を移築し、明治・大正・昭和の三代にわたって増改築した住宅です。

住宅は大座敷のある和館と洋館で構成されていて、市は安川電機からの無償譲渡などを受けて、当初は和館と日本庭園を保存・整備し、洋館は解体予定でした。

しかし、4月中旬に文化財調査にあたった九大の木島孝之先生の尽力で、洋館が大正末期から昭和初期の最先端の洋風建築であることが認められて、保存することが決定しました。

洋館は木造2階建て（1926）で、敬一郎が隠居生活を送った洋風の客間、食堂、寝室や座敷などで構成されています。外観はチューダー様式で、外装は国内初期のモルタル塗り、内装には吉野石膏製初期の石膏ボードが使用され、クロスはサイズから輸入品であることが推測されます。また、設備面では衛生陶器は初期の東陶機器製で、ラジエーターは米国製が使用されていて、配管保温材として藁が巻かれていて、大正時代の最新洋式住宅として現存する住宅として大変興味深いものといえます。洋館は日数を限定した内部公開を検討中とのことですが、当面は追加補修が必要であるとしています。



洋館正面



洋館食堂

(注) 安川敬一郎 (1849～1934) は、炭鉱事業で成功を取
り、炭鉱の近代化や官営八幡製鉄所の誘致に貢献し
た実業家で、安川電機の操業発起人でもあります。

■平成30年度研究部会だより

□歴史部会

部会長 河田克博 (名古屋工業大学)

今回は特にありません。

□人間工学部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

昨年度は、研究会の企画段階で終わってしまい、研究会開催に至っておりません。申し訳ありません。今年度はぜひ研究会を開催していきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。なお、会員の皆様から研究会の内容等につきましてご要望があればぜひご連絡頂きたい。また、部会の活動に関心がある方もぜひご連絡下さい。お待ちしております。(mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp)。

□教育研究部会

部会長 金子裕行 (千葉県立市川工業高等学校)

平成30年5月13日(日)に平成30年度第1回教育研究部会を専門学校ICSカレッジオブアーツにて開催いたしました。出席は、金子、河村、高月、江川、細川の5名です。議題は平成30年度教育研究部会活動方針についてです。

今年度の活動案として以下の内容が提案されました。

(1) 学会版インテリア教育カリキュラムの構築(大学編、専門学校編、高校編)をする。

① 大学、専門学校、高校(工業高校)のインテリア

教育カリキュラムを知る。(以前、教育研究部会でまとめた論文の分析、卒業制作展の案内を活用したアンケート調査の実施、全国高等学校インテリア科教育研究会(全イ研)に加盟している高校にアンケート調査を実施。)

② インテリア業界が望むインテリア教育を探る。(総合資格を通じて企業のインテリア部門にアンケート調査、インテリア業界で働く卒業生にアンケート調査を実施。)

③ 小学校、中学校におけるインテリア教育を知る。(全イ研加盟校の出前授業の実態調査)

④ 欧米、アジアにおけるインテリア教育を知る。

⑤ 人工知能、IoTなどの技術革新による第4次産業革命に対応したインテリア教育の検討。

⑥ 高校におけるインテリアを教える教員の減少、不足。インテリア教育を実践する教員の育成に関する検討。

(2) 卒業制作展の巡回展を教育研究部会で企画する。

① 立川ブラインド地下展示スペース

② ジャパンテックス(東京ビッグサイト)等

(3) 教育研究部会主催のイベントを企画する。

インテリア教育の視点から見学会、体験会、シンポジウム等。

次回第2回の教育研究部会は、9月1日(土)に開催する予定です。

□期限付き研究部会

部会長 西出和彦(東京大学)

今回は特にありません。

■事務局からお知らせ

白石光昭(千葉工業大学)

現在も昨年度分の年会費をお支払い頂いております。学会活動の推進は皆様の年会費が中心となりますので、遅れてもお支払い頂ければ幸いです。昨年度分年会費のお支払いをお忘れの方は、お早めにお振込み頂きますよう、お願い申し上げます。

なお、今年の年会費のお支払い依頼は、総会後にお送りする予定になっております。今年度もよろしく願いいたします。

最後に、皆様もご存知のように事務局を毎日開いているわけではありませんので、ご不便をおかけしていることも多々あると思いますが、お問い合わせはできるだけメールにてお願いいたします。

■ 編集後記

広報委員 清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）

会報第61号、執筆依頼から原稿締め切りまで、短い期間だったにも関わらず、迅速にご対応いただきました皆様に感謝申し上げます。しかしながら、その後の編集・校正作業に遅れが生じ、5月末の発行予定が延期されてしまったこと、まずはお詫びを申し上げます。

今号からの新企画として「インテリア学講座」をスタートさせました。企画の主旨や随時募集する原稿の詳細については、前号の広報委員会報告に掲載されておりますが、今後も多くのご寄稿をいただきたいので簡単に概要を再掲いたします。

【募集】「インテリア学講座：会員相互の情報共有のため、まだ道半ばの研究からご自身のお仕事紹介の場として気軽な活用が可能です。寄稿は随時受付、掲載会報は例年5月末発行の春号とします。原稿の基本は見開き2ページ（5,400文字以内、写真・図面・絵も含む）とし、Wordファイルにて、広報委員会 jasis.koho@gmail.com までお願いいたします。」

初めての会報編集を担当させていただき、（正直な所、これまでざっと目を通して会報のすべての記事を一字一句熟読することはなかったので、）個人的にはインテリア学会全体の活動、各支部・委員会・部会における全国の会員の皆様の活動を知る良い機会となりました。教育部会の報告からは、「学会版インテリア教育カリキュ

ラムの構築」や「インテリア業界が望むインテリア教育を探る」動きがあることを知り、高専での私の本務にも直結する内容なので、今後の活動をしっかりフォローしようと感じました。中国・四国支部の報告にある「古民家・古材」に関する講演会の内容もとても興味深く感じ、私の所属する東海支部でも同内容の講演会実施を提案しようと思っております。各支部・各部会の活動予定を、他支部・他部会、会員全体で共有できる情報提供のあり方の検討が、今後の会報や広報委員会の課題になるかもしれません。

今号編集作業で感じたことを広報委員全員で共有し、次号編集へ繋げて参ります。今後とも皆様の温かいご支援とご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

■日本インテリア学会会報第61号（2018. 6. 22発行）

編集者： 清水隆宏

発行者： 直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会： 棒田邦夫（委員長）

井上貴司、小俣祐樹、西岡基夫、

松尾兆郎、清水隆宏

電話・FAX：076-229-8884

e-mail：jasis.koho@gmail.com

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 白石研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp